

■ウインド Etc. (風のエトセトラ)

神風のルーツ/風の歌：忠臣蔵/翹果（しか）の飛行

日本風力発電協会 事務局 清水 路子
株式会社風力エネルギー研究所

風のエトセトラ

風神のルーツ

風をつかさどるこの神は、古代中国では風伯といい、雨をつかさどる雨師とともに祭られるが、日本では背中に太鼓を重ねた雷神と対になっている。京都・三十三間堂の風神・雷神の彫刻や、俵屋宗達の屏風絵に描かれた風神・雷神図は特に有名である。

風神のルーツは中央アジアやガンダーラの風神だと言われているが、実はその源流は遙か西方のギリシャにあった。風神の特徴の一つは両手で風袋を持ち肩に担ぐ姿であるが、これはギリシャの風神の北風の神ボレアスのマントに由来するのだ。

(「風と風車のはなし」牛山泉著より抜粋)

風の歌：忠臣蔵

風の歌でも物騒なのはこの歌である。元禄14年(1701)3月14日、江戸城内松の廊下で吉良上野介への刃傷事件を起こした播州赤穂の城主浅野内匠頭が、同日夕刻「私の悔恨これあり」というのみで、一言の申し開きもせずに詠んだ辞世の句は、

風さそふ 花よりもなほ われはまた
春の名残りを いかにとやせん

であった。この歌には、内匠頭の無念な思いが「言霊(ことだま)」となって込められ、浅野家の家臣47人による敵討ちへの心理的背景になっている。春風とともに散ったその切ない真情が、浅野の家臣をゆり動かすにちがいないという予測を、すでにこの切腹の日に、幕府の首脳たちは抱かざるをえなかったのだ。

(「風と風車のはなし」牛山泉著より抜粋)

翹果（しか）の飛行？

植物の種子や果実に扁平な翼が発達し、ヘリコプターのように回転しながら落下するものがある。その代表的なものがカエデやマツなどで、1枚のプロペラのような翼に過ぎないが、落下するときにはくるくると回転する。この自動回転は、落下速度を低下させ、もし、落下の途中で風が吹けば、それだけ遠くにとばされることになり、種子の分散を拡げることになる。

(中略)

これらの翼をもつ翹果は、無風状態では遠くに飛んでゆくことはないが、東南アジアの熱帯林に生えるアルソミトラ・マクロカルパの種子は、薄くておおきな羽根のような翼があり、全くの無風でも回転せずにまるでグライダーのように滑走することができる。

(「風と風車のはなし」牛山泉著より抜粋)

<書籍の案内>

「風と風車のはなし」
～古くて新しいクリーンエネルギー～
牛山 泉 著
成山堂書店 発行
(平成20年1月18日発売)

長年風力発電に携わっていらした牛山先生ならではの、その歴史と愛情がふんだんにあらわされた著書である。

‘風’のイメージは古今東西の神話から始まり、詩や古典を経て、自然界から科学され、芸術へまでも発展する・・・様々なジャンルにしなやかに挑んだコラムは、前後の脈略のないところがまた逆にスリリングでもある。

何事でもいいとか悪いとか言う以前に「徹する」ことの大切さ、単なる風車の歴史や工学だけではない、著者の潔さが心地よく、生き方そのものさえ見えてきて読後がさわやかである。